

Bangladesh南部避難民救援事業（第5班 事務管理要員）報告¹

国際医療救援部 国際救援課 黒田美紀
(派遣期間：2018年2月16日～3月22日)

日本赤十字社（以下、日赤）がBangladesh南部避難民救援事業を開始してから半年が経ちました。私が最初に大阪赤十字病院の職員を現地に送り出してから半年です。その間日赤の医療支援はモバイルクリニックから仮説診療所へと拡大し、私達が派遣された第5班はERU（Emergency Response Unit）活動の収束と長期的支援への移行に向けた過渡期のフェーズでした。今回の人道危機の概要は、先遣隊から第4班までの報告書にて詳細に説明されていますので、そちらをご覧ください。第5班は最大時点で25名の要員を要した、非常に大きなチームでした。私達の活動には要員に加え、70名弱のローカルスタッフ（Bangladesh赤新月社（以下、バ赤）スタッフ+コミュニティボランティア）がいて成り立っています。

事務管理要員（アドミン）の仕事とは？

ERUでの事務管理要員の仕事は多岐にわたります。要員の宿泊先手配、航空券手配、前途金管理、車両管理、ローカルスタッフ管理、広報、物品調達、インベントリー管理など様々な業務があり、それらを事務管理要員の中で分担しています。第5班ではヘッドアドミン1名、アドミン3名（うち1名は技術要員と兼務）で、私は主にローカルスタッフ管理と広報を担当しました。第5班のアドミン業務として特徴的だったのは、拠点を避難民キャンプ近くのベースキャンプに移動したこと、また第6班以降日赤要員の数が減少することを見据え、ローカルスタッフ間の協調に向けた取り組みを実施したことです。ベースキャンプ（テント）への移動は、仮説診療所にあったオフィスの移動、ホテルのミーティングルームに保管していた資機材のベースキャンプへの搬入を伴いました。そのための車両手配、労働力確保、テント下にひく砂利の手配まで、様々な業務に対応しました。ほとんどの要員は3月頭にベースキャンプへ移動しましたが、その後もホテルに残る一部要員とバ赤スタッフは元のコックスバザールから通勤することとなり、車両管理も複雑化しました。バ赤スタッフへのトレーニン



ベースキャンプにオフィステントを設置



毎日ホワイトボードで人と車の配置を管理

¹ 国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、『ロヒンギャ』という表現を使用しないこととしています。

グも必要でした。事務管理要員の仕事は決してルーティンワークではなく、突発的に発生することにも柔軟に対応していくことが求められていました。

ローカルスタッフの労務管理とは？

本事業でのローカルスタッフとは、18名のバ赤スタッフ（医師・看護師・助産師・通訳・管理要員・ボランティア）と49名のコミュニティボランティア（多くは避難民からなる）を指します。² 私の役割は、ローカルスタッフの出欠管理の取りまとめ、給与計算、給与支給、人員配置の検討、スタッフ内で問題が生じた際の対応、バ赤管理要員や一部コミュニティボランティアのタスク管理といった通常業務に加え、第5班ではローカルスタッフ間の協調に向けて、仮説診療所にて初めてローカルスタッフ全員を対象とした赤十字オリエンテーションを企画・開催、3月にはバ赤スタッフを対象にバ赤や国際赤十字・赤新月社連盟より講師を招き赤十字やバングラデシュでの ERU 活動に関するオリエンテーションを開催しました。仮説診療所での赤十字オリエンテーションに関しては、避難民ボランティアのリーダーの方とバ赤管理要員の方と日赤から私の3名で、開催日時や実施方法、テーマなどを話し合いました。当日もあくまでも日赤要員はオブザーバーで、ローカルスタッフの積極的な参加を促し、避難民とバ赤の間にある壁を自分たちで少しずつ取り除いてもらうよう試みました。また、第4班から取り組んでいたコミュニティボランティア向けの T シャツと帽子的支給に関して、バ赤管理要員が担当している帽子的発注がなかなか進まなかったため、バ赤管理要員のタスクスケジュールを本人の了解を得ながら作成し、最終的に期限内に帽子を調達し、ボランティアへの支給を完了することができました。その他、第6班以降の活動に向け、バ赤スタッフの給与計算方法をバ赤責任者との話し合いで明確にするなど、常に関係者との共通認識が確立できているか意識しながら行動するよう努めました。



コミュニティボランティアの男性と給与支払の打ち合わせ



赤十字オリエンテーション（赤いベストを着用しているのがバングラデシュ赤新月社スタッフ、着用していないのがコミュニティボランティアの避難民）

² 2018年3月17日時点

結びにかえて

バングラデシュ南部での今回の人道危機は収束の兆しがありません。先の見えない不安の中でも避難民の方々は生きるために、家族を支えるために必死で生活をしています。私達の診療所を支えるボランティアの方々も同じです。仮説診療所の補強工事を担当してくれた避難民の方々は、炎天下の中、私が休憩を勧めても休憩時間も惜しんで働いていました。彼らにとっての働くことの意味、生きることの重みを教えられました。避難民の方々が生き延びてくれたこと、そして避難民の方々を支える全ての関係者の方に感謝の意を述べ、今後も彼らに寄り添っていきたく思います。今後も日赤の国際活動への変わらぬご理解、ご支援の程宜しくお願い致します。



仮説診療所の補強工事をする避難民の方



仮説診療所で清掃員として働く避難民の方



仮説診療所で薬局業務をする避難民の方